

【読者の窓】

下記は鉄道沿線本を購入して読み続けている読者の声です。

沿線の近現代史シリーズから 3 冊を読んで

松川秀人

クロスカルチャー出版から刊行されている沿線の近現代史シリーズは、現在までに 8 冊が刊行されています。これまでにその内の 3 冊を読みましたので読後感を述べてみたいと思います。

3 冊を刊行の古い順に取り上げていくことにします。最初に永江雅和著『京王沿線の近現代史』（2017 年）です。本書は第 1 章で導入として京王線の歴史を知るためのキーワードを掲げ、第 2 章から第 11 章までの 10 章で新宿から八王子・高尾までの沿線とその歴史を順次たどっていく構成となっています。この中で興味を持った部分を取り上げます。第 2 章では新宿のランドマークともいべき西新宿の京王プラザホテルが取り上げられています。1971 年に開業したこのホテルは、当時日本一の高さを誇りましたが、この超高層ビル建設の経緯が詳細に調査されていて参考になります。第 4 章では京王沿線が徐々に開発されていく様子を、徳富蘆花『みみずのたはこと』を引用して説明しています。これは他のいわゆる鉄道本には見られない特徴ですし、文学に目配りした著者独特の視点からの説明は印象深いです。近代日本文学に関心を寄せる私には特に興味深い章でした。第 5 章では鉄道ファンなら誰でも気になるでしょう、「井の頭線はなぜ渋谷駅が起点なのか？」という疑問に答えています。その解説の詳細は省略しますが、京王電鉄が戦中に大東急（東急電鉄の前身）に合流、戦後に分離独立したことに関係していたことが説明されていて納得が이었습니다。「東洋のハリウッド」と題される第 6 章は日活調布撮影所のある調布が沿線の中継拠点ですし、また、それと関連して京王電鉄が「シンゴジラ」などの撮影協力会社としての役割を担っていることも書かれていますし、読者として興味をそそられました。

次に、岡田直著『相鉄沿線の近現代史』（2024 年 7 月）を取り上げます。本書は、2019 年 11 月の海老名―新宿間開通、2023 年 3 月には羽沢国大―新横浜駅間を開通させ、何かと話題の多い相鉄に焦点を当てています。

本書では戦前の横浜駅の様子、その駅周辺の開発の歴史、相鉄乗客数の推移など詳細なデータをを用いながら、極めて実証的にかつ堅実な検証を行っています。先の『京王沿線の近現代史』とは、また異なったアプローチをしているという印象を受けました。読み進めていきますと、横浜市の水道整備の歴史に触れ、市政だけでなく、近隣の産業にも大きな影響を与えたことがわかります。本書を通読して海軍との関わりや横浜地域における大学再編の動きが語られているところが特に興味深かったです。他の私鉄とは違い、遊園地などの観光ス

ポットが少ないという印象のある相鉄ですが、日常生活や人間が成長していく過程に直接寄与する施設などに注目したところに著者の視点の鋭さと特徴を見ることができました。

もう一冊は最新刊の鷺崎俊太郎著『西鉄沿線の近現代史』（2024年10月刊行）です。地元福岡在住ではない読者にも西鉄沿線の魅力を一読して味わえる一冊。本書は先の二書とは異なった特徴があると実感しました。東京生まれの著者が自ら西鉄沿線の人や企業を訪ね、そこで得た知見を生き生きと伝えていて興味が尽きませんでした。第8章では著者自身も板海苔づくり体験で登場しています。本書で扱う範囲は古代の遺跡（大宰府政庁）とその保存の取り組みから、日本の経済を現在牽引している企業の歴史まで幅広いことがわかります。戦時中の鉄道施設並びに列車を狙った機銃掃射のエピソードは生々しく、まるで私自身がその場に立たされているような感じを受けました。現代に生きる私たちがいかに幾多の尊い命の犠牲によって生かされているか、教科書には出てこない事柄も鉄道会社の歴史を学ぶことで明らかになるということを知り、自分でも調べてみたいと思いました。

この沿線の近現代史シリーズはこれまでの鉄道本と異なり、その沿線の歴史や住民の生活などに着目している点が新しく、また、興味を覚えるところです。話題の多い西武線や東横線など続刊が刊行されることを期待したいです。